

不妊外来について

2019年1月作成

不妊とは妊娠はするものの流産・死産、種々の妊娠異常により健児を持つことが出来ない状態を意味する言葉です。東京大学医学部附属病院の女性診療科・産科では不妊に悩むご夫婦のための専門外来（不妊外来）を開設しております。この専門外来は1985年に開設され、これまで30年以上にわたり2500組以上のご夫婦を対象に相談を行ってきた実績があります。

不妊外来では、2回以上の流産を経験された方、過去に死産や妊娠高血圧症候群や胎児発育不全などの妊娠中の異常を経験している方、自己免疫疾患などの合併症のある方などを対象として、それらの原因を探り対策を行うことで受診された方の不安を解消し、その後の妊娠が順調となるように診療を行っています。そして、不妊の原因検査、結果に応じた治療方針の提案を行うのみならず、総合周産期センターという病院の特性を活かして、その後の妊娠で分娩にいたるまで対応も可能です。不妊のご夫婦の悩みは流産したこと自体だけでなく、妊娠にまつわる心無い一言に傷つくことや、次の妊娠までの期間や妊娠後にも流産への不安が募ることにもあると感じております。私達はこの外来の診療を通じて元気な赤ちゃんを持ちたいというご夫婦の希望に寄り添うことを目指しております。将来の妊娠に関する不安を持っていて、不妊についての検査の必要性が分からない場合でもそれぞれの方の状態に応じたご相談に対応させていただきますので、まずは受診いただければと存じます。

日時 外来は毎週水曜日午後1時からで、完全予約制となります。

予約方法

東大病院予約センター：電話番号 03-5800-8630（月曜日～金曜日 12:30-17:00）にご連絡をいただき不妊専門外来への受診希望の旨をお伝えいただき予約を入れてください。

また、受診に際してはこれまで診療を受けた病院からの紹介状をお持ちいただければと存じます。

検査の流れ

初診時には問診と必要に応じた採血・内診などの診察を行います。

初診時から2～4週間後に次回のご予約をおとりします。

受診2回目では、結果のご説明、次の妊娠に向けた方針をお伝えします。

初診時検査内容（当院では多くの検査を保険診療の範囲内で行っています）

超音波検査：子宮の形態をチェックします。当院では3Dエコーを用いた検査も行っています。

採血検査：不妊症のリスク因子について調べます。

- | | |
|------------------|---------------------------------|
| ・ 血の固まりやすさに関する検査 | ・ 自己免疫疾患の検査 |
| ・ 抗リン脂質抗体症候群の検査 | ・ 血糖値の異常の検査 |
| ・ 脂質代謝の異常の検査 | ・ 甲状腺機能の検査 |
| ・ 血液型検査 | ・ 希望者には夫婦染色体検査（ご夫婦それぞれの検査を行います） |



検査費用

*** 下記は一般的な費用となります。受診される方の状態によって異なる場合もあることをご了承ください**

検査 約3万円（ご夫婦染色体検査を行う場合は 合計で約5万円）

結果お伝え時 約6千円（不妊相談料として）

（受診2回目は自費診療となります。自費診療日には処方箋は可能ですが、すべて自費となります。）

Q&A よくある質問にお答えします。

● 不育症ってなんですか？

→妊娠はするものも、流産・死産・新生児死亡などを繰り返して結果的に子供を持っていない状態です。また、広くは妊娠高血圧症候群、胎盤早期剥離、胎児発育不全などの胎盤の異常に関係する問題があった妊娠を過去に経験された方や、自己免疫疾患などの免疫の異常に伴う健康上の問題がある方も含まれます。

● 妊娠してもまた流産するのが怖いです。次も流産するのはどのくらいの割合ですか？

→当院のデータを含めた全国的な統計で、不育症で受診された患者様を対象に調査したところ、流産回数が2～3回の方で次回の妊娠がうまくいく割合は約70%です。

表1.流産回数別次回妊娠成功率

過去の流産回数	妊娠数	成功率	染色体異常を除いた成功率
2回	447	324/447(72.4%)	324/405(80.0%)
3回	326	239/326(73.3%)	239/296(80.7%)
4回	106	65/106(61.3%)	65/100(65.0%)
5回	38	20/38(52.6%)	20/34(58.8%)
6回	22	5/22(22.7%)	5/17(29.4%)
7回	13	6/13(46.2%)	6/11(54.5%)
8回	3	1/3(33.3%)	1/3(33.3%)
9回	3	1/3(33.3%)	1/3(33.3%)
11回	2	0/2(0.0%)	0/2(0.0%)
14回	2	0/2(0.0%)	0/2(0.0%)
計	962	661/962(68.7%)	661/873(75.7%)

P<0.0001

不育症研究班の施設内での調査の結果の集計（東大病院での結果を含む）

不育ラボ HP より <http://fuiku.jp/index.html>

● 妊娠が判明した時はどうすればいいですか？

→不育症外来を受診後のご妊娠では、何らかの薬物治療が必要な場合、薬物治療の必要でなく自然経過観察の場合のいずれであっても、妊娠反応が確認されたらなるべく早め（1-2週以内）に当院の不育症外来を受診してください。その場合の予約は、予約センター（03-5800-8630）にお電話いただき「妊娠をしたらすぐに不育症外来の受診をするように言われているので予約が必要」と伝えて、予約を入れるようにしてください。通常よりも短めの間隔での診察を行い、経過を慎重に診させていただきます。

東大病院では総合周産期センターという特性を活かして、流産が回避されて妊娠が継続できた後の妊婦健診、分娩まで継続して対応させていただくこともできます。また、妊娠12週ごろまで経過が順調であることが確認されれば、ご希望があれば他院へのご紹介も可能です。

● 不育症外来を受診後の妊娠でまた流産した場合はどうしたらいいですか？

→不育症外来受診後の妊娠で残念ながら再び流産となった場合は、さらに流産の原因について検討を行った上でその次の妊娠に向けた対応について相談をいたします。妊娠初期の流産である場合には、待機的に妊娠組織の娩出を待つ方法と手術を行う方法があり、それぞれの方の状況に応じて対応を選択いたします。一般的な流産の原因の多く（8割程度）は染色体の流産ですが、染色体が正常であるにもかかわらず母体側の何らかの要因により流産となっている場合もあります。そのため、流産時の胎盤絨毛の染色体を調べることによって、その次の妊娠における不育症の治療方針の決定に有益な情報が得られる場合があります。そのため、不育症外来を受診後の妊娠において流産となった方には絨毛染色体検査（約7万～10万円）を行うことを推奨しています。この検査は健康保険が適用されない検査であるため、自費診療による費用となることをご了承ください。また、流産後日数が経過し、自然に胎盤組織が排出された後の組織では検査が不能となる場合があることについてもご理解ください。